

春燈

3 月号

March 2011



主宰の句

安立公彦



冬麗や永久の微笑の伎芸天

繭玉に披講のこゑの潔し（新年大会二句）

拵りつつ影ふくれゆく初雀

風に痩せ日に褪せゆくや冬薔薇

姉妹らし早梅仰ぐ顔寄せて

安住 敦の句

穴を出て昨日や今日の墓でなし

「春燈」昭和四十九年

敦先生は、星占で蟹座の生れ。水辺に住めば運が開ける由。疎開のつもりで引越した柿の木坂のお宅の前には門川があつた。その水辺で産卵後、庭に戻つて二度寝した墓が這い出して来て、この家のすべてを知り尽しているぞと言わんばかりの風情。最近、あまり見掛けることが少なくなつたと思つたら、絶滅危惧種に準ずるランクに入つたらしい。墓を見詰める先生の目差が優しい。

上山 永晃

晩年が大事の牡丹囲ふべし

『柿の木坂雑唱以後』六十年三月

同年の作に〈渡る鐘花惜しむとはいのち惜しむ〉があり、この頃ののちを愛おしむ句が多く詠まれていると思う。師のうちに秘めた決意のほどが、座五の〈囲ふべし〉に表出されている。シャイな師としては、自問自答であろうか。この頃、私は初めてご挨拶した。慈父のような深い目差を忘れることは出来ない。

師は、それから三年後にお亡くなりになられた。

木多 芙美子

燈下集

○ 柴崎富子

地下街に短日はなし老舗市
郵袋の霜を引きずる重さかな
機関車は車庫へ豪雪積みしまま
冬濤の追手が囲む荒岬
淡雪のすがる魚板の鱗かな

○ 園部落郷

左見右見して冬ざれの野と思ふ
雪囲する鎚で指まとも打ち
雪はげし先師の忌なる討入日
鳥海を咫尺に屋根の雪卸す
宿の灯を消せば南部の雪明り

○ 松橋利雄

灯台守二^タ畝の葱育てけり
無聊なら無聊たのしむ蕎麦つ搔
一病の日々も自分史冬至風呂
福相の耳朵を褒め年忘
拾ふ神の拾ひし命初霞

○ 植田利一

数へ日となりたる空よ雲一つ
大つごもりてふ言の葉が好きで
元朝やおーい徳永辰雄元気が
田作りやかかくは不肖の弟がひとり
葉牡丹の渦の迷路となりけり



○ 小島 禾 汀

師へ友へ常の癖字の賀状書く

護符を求む終弘法身銭きる

数へ日の生活に記す詩いくつ

友よりの寒中見舞「和」の墨書

日脚伸び順光もはら阿夫利嶺々

○ 橋 爪 隆

妻亡しの卒寿やひとり年暮るる

電気行火頼みの床や老い深い

湯婆を抱き寝ひとりや書見の灯

淋しさの窓閉ざすなり雁渡し

炬燵檣はづす小銭の二・三枚

○ 橘 正 義

ホール出づればマラーイヤーの紅葉散る

落葉掃が好き落葉焚もつと好き

鍋奉行大いに河豚を喜ばす

『耄碌寸前』なる書が当り年上

ゴッホ展二度見て年を惜しむかな

○ 小林のり人

点鐘板のこる火の見や冬ざるる

十二月八日戦争を知らぬ子と

柚子風呂の柚子の浮力やはしやぐ児と

里雪の降りしきるのみみてをりぬ

雪国に慣れて歩幅の定まれり

○ 三 上 程 子

綿虫に明日が見えなくなりにつけり

雪女郎みくじの凶を懐に

息吐いて残る日数や年用意

回れ右しても年の瀬目の前に

白鳥の声出しかけて呑みにけり

○ 浅 野 洋 子

初日きらりと病夫快癒の兆かな

入院の夫の旬日松過ぎぬ

朝の照り夕べのかげり冬紅葉

眼鏡替へて形定まる冬の月

初恋や王子の狐らしきひと

春燈賞（抄） 25句 自選

清水美子

千年の恋を取り合ふ歌留多かな
待春の百戸の谿を訪ねけり
子規庵の芽吹き待たるる六畳間
棒道を信濃へ急ぐ春の雲
流し雛相寄りて瀬に消えにけり
風光る石の井桁の自噴水
天主つらぬく通し柱や春の月
行く春や寺歴を秘むる高野槇
白牡丹闇を揺らして崩れけり
笹百合やかな書き美しき土佐日記

城門に仕掛あまたや女郎蜘蛛
夏蝶や音なく昼を揺らし来る
女人高野石楠花色を深めけり
篝火や慈愛に満ちし鶴匠の目
相伝の木地師の鑿や菊日和
鬼やんま銀やんま欲し兄が欲し
蓮の実の飛び出す間合はかりけり
しんがりはいつもしんがり雁の棹
切絵めく京の街並十三夜
残菊や角の欠けたる巴塚
翁堂の藁屋根伝ふしぐれかな
罅走る翁の墓碑や石路の花
冬桜三井晚鐘の音澄めり
一葉の遺品小ぶりや冬至梅
風花や師の句碑に会ふさざえ堂

春燈賞（抄）25句

自選

片山博介

冴返るものに詩を書く指の先

叡山にうす紅の雲纏納

椎の木の芽吹の雨や幻住庵

みちのくへつづくこの道かぎろへる

百代を湧きつぐ水や春の月

緑さすみどりごの掌の生命線

天上になにびと在す朴咲けり

くれなゐの影ひるがへり金魚鉢

みちのくは雲ゆたかなりラムネ噴く

お花畑あまたたび雲通り過ぎ

長旅の雨の一日や合飲の花

鮎の腸食ふや星空狭き溪

暗闇にとよむ佞武多の大大鼓

鮮やかな彩撒き散らし佞武多の夜

夜半の雨佞武多の熱をさましけり

秋風や溶けむばかりの山羊の鬚

今際の言葉無かりし父や鯛雲

地酒酌むかりがね寒き北近江

落飾の女人の棲みし花野かな

墓碑銘に脱藩の文字鳥渡る

尊王も佐幕も土に草の花

デカルトに似たる乞食や年の暮

ラフカディオ・ハーンの愛でし雪女

知恵の輪の抜けし一瞬冬の雷

蘆の芽や船過ぎてより波の音

当月集

安立 公彦選



○ 清水美子

凛々と冠雪富士や湖の碧

逆さ富士乱して鳩の潜きけり

落葉松の裸木泣かす富士風

雪ぼたる樹海の黙を深めけり

蒼穹の富士や無音に凍つるかに

○ 片山博介

高塀の黒猫義士の日なりけり

抽斗に古鍵三つみそさざい

熱爛や光秀鼻肩われひとり

重ね置く本を砦に炬燵の陣

年の暮無産書淫の徒となんぬ

○ 矢口笑子

極月や人押し退くるクラクシヨン

宴会の帰り道連れ風邪の神

ぼろ市に拾ひし句なり懐に

短針を追ふ長針や晦日蕎麦

鼻唄の夫の機嫌や初鏡

○ 永島雅子

踏む音が好きで落葉の径をゆく

セーターより朝の光へ顔出せり

日を透かし古刹を囲む冬紅葉

冬曙足踏みに待つ始発駅

貸農園小葱と換ふる根深かな

○ 宮沢治子

三年坂に七味を購ふも年用意

大根引く子の尻餅の小さき穴

青墨の銘一ツ亀初硯

冬うららまヌカン解かぬ無表情

春立つや老僧の掌に鳩の餌

春燈の句

安立 公彦選

山畑の寒氣足よりのぼりくる

京都 四方ハツ子

黄落や山迫り来る鯖の道

流感やさねなる夫の厨事
炭ついで何も聞かずにゐてくれし

大根を抜きたる穴に土の息

朱印状受けて寺辞す冬紅葉

ふるさとへ流るる雲や木守柿

ペランダや百八十度の冬茜

負けて勝つ大正生れ鏡餅

兵庫 八家こひで

初春や弟子も雀も日溜りに

販売機の灯のついてをり日短か
駅までの道白み初む冬の朝

ひんがしへ向け投函す初懐紙

かいつぶりビュツフェの青き女たち

雪割草老いの失敗うべなへり

墓に古る対の竹筒石路の花

西行の仮名美しき初座敷

埼玉 市川 玲子

一品は老いの役目の雑煮かな

不機嫌な寒九の海やココアの香
しぐれ来て雑木林の香を深む

餅花や大黒柱の黒光り

風呂吹に竹箸あをく揃ひけり

憂きことは方向転換去年今年

待つことに刻すごしけり十二月

大熊手夕星ひいて戻りけり

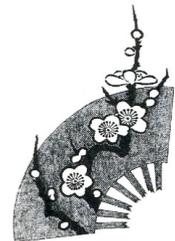
神奈川 浅木 ノエ

ココア吹く子の住む町に雪降れり

短日の駅へふたりの影長し
乾きたる足音宙に冬山路

千葉 西岡 啓子

千葉 小淵二美江



余言

安立公彦

白鳥の一羽大きく羽搏けり（祝春燈賞）

西川 保子

三月号には、春燈賞、春星賞受賞作家への祝句が多く寄せられた。こういう慶事への挨拶句は見ていて心地良い。それはまた、久保田先生から受け継いだ「春燈」の思い遣りの伝統でもある。

掲出句、春燈賞受賞の片山博介氏への祝句。作者は現在春燈阪神句会ほかの指導に当たっている。受賞者の博介氏は当年五十七歳。その年代の現代俳人に擬するに、「白鳥」はまことふさわしい。心尽した祝句だ。

初松頼めでたさ重ね重ねかな（祝春燈賞） 上山 永晃
吉上の雪の夕べとなりけり（祝春星賞） 上山 永晃

前句は春燈賞受賞の清水美子さんへの祝句。後句は春星賞

の都丸美陽子さんへの祝句。作者は受賞両氏の句会の指導者である。

今月号に寄せられた多くの人の三氏への祝句を見てみると、挨拶句というものの多様さに感じ入るものがあった。

山本健吉に「挨拶と滑稽」という名著がある。今さら書くまでもなく、多くの皆さんが一度は手にした本である。この中で山本健吉は俳句を、滑稽、挨拶、即興の三つの命題の上に成立するものであると指摘し、中でも挨拶については、「滑稽によって俳句の本質を狭くし、ぼり、挨拶によって俳句に社会的な広い場所を導入する」と説く。

前句、作者の慶びを有りのままに述べ、その真情で一句をまとめている。後句は、「吉上の雪」の発見から導かれた句とともに祝句としてふさわしい作品である。

雪ぼたる樹海の黙を深めけり

清水 美子

富士山麓の樹海を探勝しての句。どの句も春燈賞受賞第一作としての心構えに充ちている。

綿虫には、雪虫、雪蛭、大綿などの傍題がある。その中から「雪ぼたる」を選んだのもこの句にふさわしい。しんしんと舞う綿虫を見ていると、樹海がかもす底知れない静寂さに、わが身をとり込まれる思いがするのだ。

重ね置く本を砦に炬燵の陣

片山 博介

この句の前に、〈歎欄や光秀鬣肩われひとり〉の句がある。掲出句も一連の発想によるもの。

作者の読書熱は驚くばかりだ。読書の幅も広範にわたる。この句、そういう読書家ならでは作品。炬燵と言えば、〈横顔を炬燵にのせて日本の母 草田男〉や、〈あはれ子のひとりもぐれる切炬燵 鏡太郎〉などの句を思い出すが、作者の場合は只管読書である。

春燈賞受賞第一作であるが、わが道を行く、である。いかにもこの作者らしい句だ。

宴会の帰り道連れ風邪の神

矢口 笑子

この句は先に述べた山本健吉の、挨拶、滑稽、即興の要素を良く兼ねている句だ。一句を唱したあとの何とはなしの面白さ、ふと口をつけて出る即興、そして寒気を覚えた対象を風邪の神と擬人化する挨拶。それらのことが、殆ど日常会話の一節のように表現されている軽妙さ。古俳句の格調には遠いが、これは紛れもなく現代俳句である。

寒紅さす華の八十路を目前に

金森 涼

俳人としてまことに上質な姿勢である。「華の八十路」とは言い得て妙と言うべきか。作者は七十九歳。まさに八十路目前の年齢である。一般にはそのことを否定的に詠む人が多

い。三月号にはことにそういう句が多かった。

それらの中にあつて、自らの老いを積極的を受け入れる表現は強く印象付けられた。俳句を作る上で最も避けるべきことは、己れの年齢を後ろ向きに捉えることである。

寒紅をすこし濃くして夫見舞ふ

河本由紀子

十二月本部句会で特々選に頂いた句。入院中のご主人を病床に見舞う作者。しかしそこには「寒紅をすこし濃く」している作者の姿がある。その寒紅の濃さは、ただただ入院中のご主人を励ます思いから来ているのだ。

この句も前の句と同じように、前向きな発想から浮かんだ句だ。そして作者の思いは、見舞を受けているご主人にもよく達したことだろう。

天狼や砂丘音無く夜を深む

後藤眞由美

「天狼」は「天狼星」、犬座の首星「シリウス」の中国名。光輝全天随一の白色星、とある。

日本最大の砂丘、鳥取砂丘での吟か。目に見えるものほどこまでも続く大砂丘。やがて日が落ちると、その砂丘は音もなく冬の闇につつま込まれてゆく。はるかに仰ぐ南天に、ただ一点白く輝くシリウス。

調べの整った句だ。「砂丘音無く」がその調べをよく補っている。